

と下問された。新八郎は恐れながら山国の柏餅にござりますると言上した。秀吉はきげんなめならず、心づくしまことに殊勝じゃこの柏餅にちなみ、汝に柏木の姓を与える。以後柏木の姓を名乗るがよからう」と新八郎は破格の栄誉を賜ったという。

その頃、一方江花の宿に屯した蒲生氏郷以下の将兵は、雷神ヶ原に江花川の清流をはさんで休止をとった。村人は総出で軍旅の労をねぎらい、柏の葉、朴の葉などに赤飯をもち、さ湯を出して待遇した。その当時の模様を史書は「軍馬の騒音山野にこだまして立錐の余地なし」と伝えている。

やがて一行は、心づくしの謝礼に何がしかの金子を与えて立ったという。

さて村人は、この一世一代の盛事を記念するため、太閤祭りとなづけけた。そして毎年雷神ヶ原に集まって、赤飯をたき、酒をくんで祝うことにした。以来三百数十年、年移り、世が変わってもこの祭りは続いている。そして古老は太閤様お通りの際は、ああもこうもと往時の有様を語り伝えている。

今は陽春四月、村の子どもら若者たちが江花川原の両岸に集って、各々隣組ごとにかまどを築いて飯を焚いて、山菜、玉子や、味噌など持ちよって、むしろを敷き、村の年寄を招いて、踊りうたい一日を楽しく過ごす、ままたき祭り(太閤祭り)である。

(話者 久保初五郎)